

女房としての紫式部

古瀬 奈津子

はじめに

『源氏物語』は王朝文学の代表的な作品であり、後世に与えた影響も大きい。作者の紫式部については、今まで主に文学的な視点から語られてきた。紫式部は平安時代中期の一条天皇の中宮である藤原彰子の女房であった。王朝文学は『源氏物語』だけではなく、宮廷に仕えた女房によって書かれたものが多い。今回の発表では、紫式部の女房としての側面に注目し、宮廷においてどのような役割を果たしていたのかを中心にみていきたい。

1. 紫式部の生涯

紫式部は、父藤原為時と母藤原為信女との間に生まれた。父も母も文化人ではあるが、受領階級出身の中級貴族であった。当時の貴族階級の女性については、生没年もはっきりしない場合が多く、紫式部の生年についても諸説がある。

長徳二年（九九六）官位に恵まれなかった父為時がようやく越前守に任じられ、父に従って紫式部も越前に赴いた。長徳三年の冬から四年春にかけて、紫式部は帰京し、長徳四年の晩秋から冬にかけて、藤原宣孝と結婚して、翌長保元年（九九九）には娘賢子が生まれたと考えられる。

ところが、長保三年春四月二十五日、夫宣孝は疫病によって亡くなってしまった。その後、紫式部は『源氏物語』を書き始めたと考えられている。その評判によって、紫式部は寛弘二年（一〇〇五）または同三年十二月二十九日に時の一条天皇の中宮藤原彰子（道長長女）のもとに女房として出仕することになった。

紫式部が宮仕えをするようになる頃、『源氏物語』は宮中で広く読まれていたらしく、一条天皇が「この作者は日本紀を読んでいるにちがいない」と評したことが『紫式部日記』にみえている。その漢学の学識が高くかわれ、中宮彰子に白居易の新楽府を講じたことも同じく記されている。

寛弘五年（一〇〇八）には中宮彰子が妊娠し、出産のために父道長の土御門第に退出した。九月十一日、中宮彰子は待望の皇子敦成親王（一条天皇第二皇子）を生むが、出産、その後の産養や一条天皇の土御門第行幸、五十日祝、百日祝などの様子を詳細に記録したのが『紫式部日記』である。土御門第に滞在中に、『源

氏物語』の大部分は書き上げられており、内裏に戻るまでの間に、その冊子作りが中宮御前において女房たちによって行われていたことが『紫式部日記』にみえる。

寛弘六年（一〇〇九）十一月には中宮彰子は敦良親王（一条天皇第三皇子）を生むが、寛弘八年、一条天皇は病気のため、三条天皇に譲位した後間もなく亡くなる。紫式部は一条天皇没後も、中宮彰子に仕えた。長和元年（一〇一二）中宮彰子は皇太后となり、内裏を出て、枇杷殿に住んだ。枇杷殿にいた彰子のもとに、藤原実資がたびたび伺候していた。養子資平の任官を皇太后彰子から道長へと頼んでもらうという目的もあったが、単なる利害関係による伺候であったわけではない。後のことになるが、彰子の息子である後一条天皇が即位した後に、皇太后彰子は実資に対して左近衛大将にならないかと打診したりするなど、実資鼻根のところを見せている。一方、実資は皇太后彰子を「賢后」と評している（『小右記』長和二年二月二十五日条）。

この皇太后と藤原実資の取り次ぎをしていた女房が紫式部なのである。『小右記』長和二年五月二十五日条に「資平を去んぬる夜密々皇太后に参らしむ。東宮御悩みの間、仮により不参の由を啓せしむ。今朝帰り来たりて云わく、去んぬる夜、女房に相逢う（越後守為時の女。此の女を以て前々雑事を啓せしむるのみ）。彼の女云わく、東宮の御悩み重きにあらざると雖も、猶御尋常ならざる内、熱気いまだ散じたまわず。亦左府（道長）聊か患いの気あり、てへり」とあって、実資は越後守為時の女である女房を通じて、常々皇太后に雑事を申し上げていると言っている。長和元年から二年の間、実資はたびたび皇太后を訪ねているが、紫式部が取り次ぎ女房であったと考えられる。

長和三年以降も実資は皇太后のもとを訪れて女房の取り次ぎによって啓上しているが、その女房が紫式部かどうかは定かではない。紫式部は長和三年に亡くなったという説があるが、寛仁三年（一〇一九）まで生きていたとする説もある。彼女の没年は明確ではない。

2. 敦成親王の誕生と『紫式部日記』

(1) 中宮彰子の御産

紫式部が中宮彰子のもとに女房として出仕し始めたのは、寛弘二年（一〇〇五）または同三年十二月二十九日であった。紫式部は何のために女房としての出仕を求められたのだろうか。女房としての奉仕にはどのような意味があったのだろうか。『紫式部日記』をもとに考えてみたい。

『紫式部日記』は、一般に寛弘七年頃、寛弘五年の敦成親王の出産関係の記録を中心に寛弘七年の記事を一部加え、いわゆる「消息文」を書いて現在の形になったと考えられている。ここでは、前半部分の中宮彰子の敦成親王出産関係の記事について、男性貴族が書いた日記と比較することによって、その特徴を明らかにし、なぜ『紫式部日記』が書かれることになったのかについて考えてみたい。

中宮彰子は藤原道長と正室源雅信女倫子の間に、永延二年（九八八）長女として生まれた。長保元年（九九九）十二才で裳着を行い、一条天皇の後宮に入内し、女御となった。しかし、一条天皇には亡くなった関白道隆（道長の兄）の女である定子が入内して中宮になっていた。中宮定子には脩子内親王という子どもがおり、彰子が入内した長保元年には一条天皇第一皇子である敦康親王が生まれた。

中宮定子の父道隆はすでに亡くなり、兄伊周も政治的な地位は失っていたが、彰子はまだ十二才であり、すぐには皇子女には恵まれそうにはなかった。そこで、翌長保二年、道長は中宮定子も出家しており、藤原氏の后が行う祭祀の担い手がないという理由から、彰子を中宮として立后し、定子を皇后へと異動させた。これが一天皇二后の始まりである。ところが、皇后定子はこの年嫡子内親王を生み亡くなってしま

う。中宮となった彰子は年齢が若いこともあり、なかなか子どもが生まれぬ。寛弘四年（一〇〇七）道長は金峰山詣を行うが、目的のひとつに皇子誕生を祈願することがあったと言われている。寛弘五年になって、中宮彰子に妊娠の徴候が現れた。『御堂関白記』三月十二日条に、中宮彰子の一条院内裏退出の雑事を定めたとある。『権記』三月十九日条には、行成は夢で中宮御懐妊の慶に参入した諸僧宿徳らに生まれてくる子どもの男女を問うたところ、男だと答えたと記している。

四月十三日、中宮彰子は父左大臣道長の土御門第に遷った。その理由について、御産部類記所引『外記日記』に「御懐妊の事により、神事の間出御するなり」

とあり、賀茂祭などに備えてのことであったらしい。

六月十四日、中宮彰子は内裏に再び参入した。前日の十三日には、内裏で中宮のために御修善が行われた。七月九日、中宮は内裏から退出予定であったが、大將軍遊行方にあたるため延期されて、十六日に土御門第八へ遷った。翌十七日には天皇から中宮へ勅使が遣わされてきている（『御堂関白記』御産部類記所引『不知記』）。中宮御修善もたびたび行われ、道長は白檀の薬師仏を造らせている。

八月に入ると、内裏より中宮に御産雑具を賜っている。白木の御帳や白綾の御屏風、御几帳、御晷、御表代などで、蔵人が勅使として派遣されてきた（御産部類記所引不知記）。この頃の土御門第の様子については、『紫式部日記』にも描かれている。五壇御修法が行われ、八月二十余日からさるべき上達部・殿上人は宿直するようになったこと、里居の女房たちも参上してきたこと、八月二十六日には薫物が調合されて女房たちにも配られたことなどが記されている。

(2) 『紫式部日記』と『御産部類記』所引「不知記」

『紫式部日記』によると九月九日夜中から、御産部類記所引『不知記』によれば十日暁更から御産の気色がみえはじめ、十日寅刻（午前3～5時）、尋常の御帳を撤し、白木御帳を立てて、中宮彰子は移る。他の調度類も白一色となる。

その後の経過を御産部類記所引『不知記』のうちもっとも詳細な記録と、『紫式部日記』を比較してみよう。まず、中宮職関係の男性官人が記したと考えられる御産部類記所引『不知記』からみていく。まず、皇子誕生までの経過であるが、散米（うちまき）が中宮庁によって準備されたこと、種々の御祈がなされたことが記されている。『紫式部日記』の方はどうだろうか。十日については、中宮彰子はたいそう不安そうに、起きたり横になったりして過ごしたとある。また、物の怪を調伏しようとする修験者（僧侶）や、陰陽師が限りなく集められ、御誦経の使が寺々へ派遣される。御帳台の東側には内裏の女房たち、西側には物の怪の憑人（よりまし）と修験者たち、南側には僧正・僧都たち、北側の狭い所には女房たちが四十余人ほど伺候している。

このように、『紫式部日記』の方が記述がはるかに詳しい。漢文の記述が簡潔であるのに対して、和文の表現が詳細な描写にふさわしいというだけではなく、記主の立場による違いであると考えられる。『不知記』記主が男性の官人で、御産の場そのものには立ち会っていないと考えられるのに対し、紫式部は中宮彰子の側近くに伺候していた。つまり、このような御産

の場合そのものの記録は、男性官人には無理で、紫式部のように中宮の側にいて子細に状況を観察でき、かつそれを和文で表現できる女房でないと書けなかったのである。

さらに先をみてみよう。御産部類記所引『不知記』の方は、次の記述はもう「午刻皇子平安に降誕したまう」であり、皇子が生まれてしまっている。しかし、『紫式部日記』をみると、誕生にいたるまでにはまだ時間が必要だった。十日に白木の御帳台に移動した中宮彰子は、十一日の暁にはさらに北廂に移動した。これは十一日が戊辰で、この日から二日間は暦によれば「日遊在內」で、産婦は日遊神を北廂に避けなければならなかったからである。僧正・僧都らがつめて加持をし、院源僧都が道長の書いた願文を読み上げた。北廂は二間あるが、そこにはしかるべき人々だけが伺候した。中宮のいる間には、母倫子、新皇子の乳母となる宰相の君（中宮女房）と産婆役の上手な内蔵の命婦が侍し、仁和寺の僧都、三井寺の内供も召された。もうひとつの間には大納言の君以下、中宮に長年仕えている女房たちが伺候した（この中に紫式部も含まれる）。几帳の外には、中宮の姉妹の乳母たちや、頼通・教通ら中宮の兄弟たち、宰相中将・四位中将らだけではなく普段はあまり親しくない人々までもいて、ともすれば几帳の上からのぞいている。頭には邪気を払うためにまきちらす散米が降りかかり、着物もくしゃくしゃになっていて後になって考えると見苦しかったろうとある。

中宮彰子は髪の毛を少し削いで受戒し、出産して後産のことがまだすまない間は、立て込んでいる僧俗がもう一度声をはりあげ、額を床につけて礼拝する。東廂にいる女房たちは殿上人にまじって、涙で顔をぬらしてお互いに茫然と顔を見合わせたりしている。中宮彰子が今お産みになるという時には、物の怪たちがのしる声が恐ろしく手強いので、新たに阿闍梨を加えたりする。

午の時に、男の御子がお生まれになった。安産である上に、男の御子であるので、そのうれしさは並大抵のものではない。昨日より伺候し、今朝ほどは涙にむせんでいた女房なども、皆退いて、中宮御前には年輩の女房たちが侍している。殿（道長）や北の方（倫子）も退いて、僧や医師、陰陽師らに布施や禄を賜り、御湯殿の儀式などの準備もなさっているのだろう。

以上のように、『紫式部日記』には、九月十日から十一日にかけて、中宮彰子出産の現場の様子が詳細に記されている。中宮彰子に近い場に侍していた女房だからこそ書けた具体性に富んだ内容で、『不知記』と

比較するとその違いは明瞭である。しかし、記録性という観点からみると、『紫式部日記』と『不知記』との共通点もあるのではないだろうか。『御堂関白記』『小右記』『権記』など他の貴族の日記がそれぞれの立場から記したものであるのに対し、この『不知記』『紫式部日記』は中宮職官人と女房という中宮彰子の生活を支える関係者によって書かれた公式記録という性格を備えていると考えられる。ただし、男性官人と女房という立場の違いから、その伺候する場が異なるため、記録された内容が相違しているが、ふたつの記録は相補って中宮彰子の出産全体を描いていると思われる。というより、相補うように初めから計画されていたのではないだろうか。

近年、『紫式部日記』の執筆目的について、山本利達氏は「中宮の女房中、文章力にすぐれた紫式部が、一大慶事たる中宮のお産に関する記録をするよう、道長から要請されて、まとめることになったのであろう」と述べられているが、まさしく頷ける説である。

皇子誕生後の行事について『紫式部日記』と男性官人の書いた『御産部類記』所引「不知記」とを比較しておこう。中宮職の男性官人が書いたと考えられる『御産部類記』所引「不知記」では、皇子が生まれるとすぐに一条天皇の乳母橘徳子が哺乳の儀を行われ、その後、天皇から御剣勅使が遣わされて来る。皇子を産湯につかわず御湯殿の儀と、読書と鳴弦が行われる。

『紫式部日記』もほぼ同じであるが、違いは皇子誕生後、中宮の母倫子が臍の緒を切ったことがみえること、女房が奉仕する御湯殿の儀の内容が詳しく記されていること、それに比較すると御佩刀の勅使と読書・鳴弦の記事は簡単であることなどがあげられる。これらの相違点はやはり紫式部が女房であるため、男性官人とは参列する行事の場が異なっていたことを表している。女房の記録には独自の価値があったのである。

3. 中宮彰子の女房紫式部

このように紫式部は、中宮彰子にとって記録係であったわけであるが、中宮彰子の女房全体の中で紫式部はどのような位置を占めていたのだろうか。女房の身分は、上臈—中臈—下臈に分かれており、乳母・典侍—掌侍（内侍）—命婦—女蔵人に分類できる。『紫式部日記』から中宮彰子の女房についてみると、上臈女房としては、敦成親王の乳付をした一条天皇の乳母でもある橘の三位、すなわち典侍橘徳子がおり、内裏女房と中宮女房を兼務していた。宰相の君（藤原豊子）や大納言の君（源廉子）、小少将の君など上臈

女房には道長や倫子の縁者が多い。中臈としては、宮の宣旨や内侍たち、命婦たちがいた。

宮の宣旨、内侍、命婦というのは女房でも公的な役職をもっているものであるが、その他にも中臈女房として、大輔（伊勢大輔）らがいた。紫式部も公的な役職にはついていない中臈女房だった。中臈女房の下には下臈女房として、女蔵人らが存在した。中臈女房は紫式部を含めて、受領階層の娘や妻室の者が多い。摂関家の受領系家司の妻には、摂関家出身の中宮やその子どもである天皇の乳母になる例もあった。

女房には局を与えられて常に伺候する者と、里住みをして臨時に出仕する者があったが、紫式部の場合は前者で、土御門第においては寝殿と東対を結ぶ北の渡殿の東端に局があり、一条院内裏においては中宮彰子の御所である東北対の東長片廂（細殿）の三つ目の間にあった。女房の仕事としては、御膳や整髪など中宮の衣食住についての奉仕、中宮の娯楽や諮問に答えるなど精神的な奉仕、そして前述したように公卿や男性官人の取り次ぎがあった。紫式部もこれらの女房一般の仕事もしており、衣食住の奉仕（五十日祝）のほか、中宮彰子に漢籍を教示したり（新樂府進講）、藤原実資の取り次ぎをしたりしている。

4. 摂関政治と女房文学

十世紀後半から十一世紀前半にかけての摂関期は、女性が文学においてきわだった活躍をした時代であるが、なぜこの時期に女流文学は最盛期を迎えたのであろうか。

紫式部が女房として仕えたのは、中宮彰子である。中宮は皇子を産み、その皇子が天皇になると中宮の父・兄弟は摂関となって摂関政治を行うことになる。従来、中宮が天皇の関心を引くために、これらの女房たちが側近く仕えたとされてきた。

しかし近年キサキの研究が進み、中宮や皇后などキサキたちには単に皇子を産むという受動的な役割だけではなく、摂関とは別の独自の政治的権能があったことがわかってきた。中宮彰子は一条天皇との間に、敦成親王（後一条天皇）と敦良親王（後朱雀天皇）という二人の皇子を産み、息子たちが天皇となると母后として大きな政治権力を握った。

彰子がかつても政治力を発揮するのは敦成親王が後一条天皇として即位した後、元服するまでの間である。この時期、摂政である父道長やその後を継いだ弟頼通は皇太后御所においてしばしば政務を行っている。また、道長と倫子を准三宮となす、道長に従一位を賜う、道長を太政大臣に任じる、妹威子を中宮に立

てるなどの重要事項が「母后令旨」によって決定されている。母后は摂政よりさらに天皇に近い立場で、幼少の天皇を補佐しているのである。天皇行幸時には天皇と同輿し、即位の儀式では天皇とともに高御座（たかみくら）に登っていることからその権能をうかがうことができる。

後一条天皇元服後も、関白頼通にかかわる事項については内覧しており、人事一般についても発言権を有している。彰子は上東門院（女院）となるが、その後も上皇と同様に朝覲行幸を受けており、道長没後はその権力を継承し、関白頼通は女院の意向をうかがいながら政務を行っている。

このように摂関政治においては、中宮や皇后といったキサキたちは摂関とは別の政治的権能を有しており、政治の表舞台で活躍していた。また、この時期は社会構造的にみると、父系の氏の中に父系の一門・一家が成立するが、いまだ「家」が未成立なため、父親の朝廷における地位は男子に継承されるが、邸宅などの財産は女子にも譲られた。「家」が未成立なため、女性は結婚しても夫の氏・一門には含まれず、結婚した女性が亡くなると、実家の墓地に葬られ、忌日法会やお盆の行事も実家方の氏で行われた。政治の表舞台で皇后や中宮が母后として権力を発揮できたのも、このような社会構造が背景にあったからだと考えられる。すなわち、摂関期は女性が「家」制度に含まれず、独自に活躍できた最後の時期であったと捉えることができる。女房文学が摂関期に最盛期を迎えたのは、彼女たちが独自の政治権力を握っていた中宮や皇后に仕えたことによって、彼女たちも政治の表舞台に立つことになり、その文学も緊張感を増し社会的な意義が大きくなったためと考えられる。

おわりに

紫式部の『源氏物語』は王朝女房文学の代表として、後世古典となって長く伝えられていった。しかし、前近代においては文学者は近代以降のように社会的に独立した存在ではなく、多くは権力者に依存した立場にあった。文学者だけではなく、芸術家一般がそうであったとも言える。今回は、このような視点から見た時、紫式部が摂関期においてどのような立場にあってどのような役割を果たしていたかを考えてみた。紫式部は中宮に仕える女房であり、その能力によって記録係として雇われたということが指摘できると思う。

参考文献

史料など

- 『御堂関白記』(大日本古記録本)
『小右記』(大日本古記録本)
『権記』(史料纂集本、史料大成本)
『御産部類記』上(図書寮叢刊本)
『紫式部日記』(岩波日本古典文学大系本、新潮日本古典集成本、小学館新編日本古典文学全集本)
『紫式部集』(岩波文庫本、新潮日本古典集成本)
『枕草子』(岩波日本古典文学大系本、小学館新編日本古典文学全集本)

著書論文など

- 秋山虔・池田亀鑑校注・解説『紫式部日記』(日本古典文学大系)(岩波書店、一九五八年)
今井源衛『紫式部』(人物叢書新装版)(吉川弘文館、一九八五年)

- 岸上慎二『清少納言』(人物叢書新装版)(吉川弘文館、一九六二年)
清水好子『紫式部』(岩波新書)(岩波書店、一九七三年)
服藤早苗「王権と国母～王朝国家と女性～」(『平安王朝社会のジェンダー』校倉書房、二〇〇五年、初発表は一九九八年)
古瀬奈津子「摂関政治成立の歴史的意義～摂関政治と母后～」(『日本史研究』四六三号、二〇〇一年)
古瀬奈津子「清少納言と紫式部一中宮の記録係」(元木泰雄編『古代の人物6 王朝の変容と武者』清文堂、二〇〇五年)
山中 裕『平安時代の女流作家』(至文堂、一九六二年)
山本利達校注・解説『紫式部日記 紫式部集』(新潮日本古典集成)(新潮社、一九八〇年)
吉川真司「平安時代における女房の存在形態」(『律令官僚制の研究』塙書房、一九九八年)

ふるせ なつこ／お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 教授